

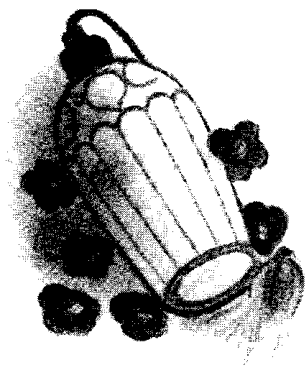
木村治美

あらあらかしこ



あらあらかしこ

木村治美



講談社

◎著者略歴

1932年、東京生まれ。1955年、東京教育大学・英語英米文学科卒。1960年、同大学・文学研究科博士課程修了。現在、千葉工業大学教授。
1977年に「大宅壮一ノンフィクション賞」を受賞した『黄昏のロンドンから』のほか『静かに流れよテムズ川』『主婦の天気図』『新交際考』『曙のイスラマバード』『しなやかに女の時間』『裸足のシンデレラ』などの著書がある。

あらあら かしこ

1982年10月10日 第1刷発行

著者——木村治美

定価——980円

© Harumi Kimura 1982, Printed in Japan



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2丁目12-21 〒112

電話 03-945-1111 (大代表) 振替 東京 8-3930

装幀——本くに子

印刷所——慶昌堂印刷株式会社

製本所——藤沢製本株式会社

●落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200269-8 (0) (学2)

まえがき

自分の書いたものを読み返してみますと、私の目はいつも内側を向いていることがよくわかります。心の中ばかりのぞきこんでいる。

内向的であることは、子供のときから、自分で気に入らない性格でした。ほかの子のように、如才なくふるまい、ものおじせずには喋りたいと思い続けて、大人になりました。

大人になったいまでは、自分の性格は自分なりに悟りました。周囲の人びとを見ると、たしかに人間は二つのタイプに分けられます。

自分の外にあるものに関心を払うひと

自分の内側ばかりのぞきこむひと

純粹に片方だけでしたら、たぶん病的だということになるのですが、両方のまじりあいのバランスは、ひとによって、どちらかに片寄っているようです。

教育を語るある集まりで、こういう発言をされたかたがありました。「私の娘は私立中学の三

年ですが、教室内でナイフをふりまわす事件を起こしました。校長は今後の管理責任があるから、転校してほしいといっています。こういう態度は教育者としてあるまじきことです。第一、数学の得点を教室内で全員に発表すれば、うちの娘のように成績が悪かった子は、反抗するのが当たり前です。それに精神科の医者は、娘の精神衛生の面からいっても、いま転校しないほうがよいといっているのに」

あとで知ったことですが、この母親は、ある地域問題の反対同盟のリーダーとして活躍しているそうです。その地域問題の是非はわからないし、両者に云い分があるでしょうが、この母と娘のすべてが、なんとなく納得できるような気がなさいませんか？ 人生が順調にいかなくなったとき、あなたは原因をどこに求めるでしょう。社会が悪い、時代が悪い、政治が悪い、いや運が悪かった？ それとも、すべての責任は自分自身にあるとお思いになりますか？

自分ばかりを責めるひとを見るのはせつないけれど、いつも自分が正しくて、自分以外のものに責任と罪をなすりつけ、責めたてるひとを見るのも悲しいことです。あの集まりで発言した母親は、娘のしたことなかに、自分の姿を見なかったでしょう。外側ばかりに関心を払うひとは、いつか何かの形で、ないがしろにされた自分の内部から復讐されるときがありましよう。

「どんなひとにも、永い人生のうちには、自分を見つめざるをえないことが起こるものです。子供の供のこと、夫婦のこと、仕事のこと、友だちのこと……そのときそれができるひとが本物です」

人生をよく知っているかたが、こうおっしゃいました。

もっと生き生きした人生を送りたいのに、それができないのは、夫の理解がないから、子供に手がかかるから、経済的に余裕がないから、親の育てかたが悪かったから、男性優位の社会構造がいけないから……。あれこれひとのせいにしてみても、心の底に、ごまかしきれないものが残らないでしょうか。

外に責任を押しつけるのは、自分の努力や能力が足りないことをごまかすための口実だとしたらたいへんです。日本全体に、なにか外罰的な雰囲気がある、何か具合が悪くなると、原因をひとのせいにする風潮がなくもないのは、もともと、ひとのいうなりに動いているからだということになりました。親にすすめられた結婚だから、不幸になったのも親のせいだと考えるようなものです。

自分を見つめるって、たいして難しいことはありません。ふと立ち止まって、日々の暮らしのなかのさまざまな事柄や感情を、ていねいに、しみじみとすくいあげてみるのです。こんなことかと思うようなものに、人生のかんじんなことがひそんでいます。それは、天下国家を論じ、正邪を告発し、闘争するようになかったこのよさはないけれど、少なくとも、ここに空しさは残りません。この本がめざしているのもそんなことです。

旅行先で、思いがけないとき、思いがけないかたに声をかけていただきます、私、木村さんの

大ファンです、お書きになった本はみんな買っていますし、切り抜きも作ってあります！

私はとても驚き、恐縮し、感謝します。もちろんですとも。でも、はずかしくて逃げだしたい気持ちにもなります。それは、一人言を聞かれてしまった気恥ずかしさかもしれません。一人言は終わりのない繰り言。同じことを気のすむまで喋り、ひとりであらずにいる。

内側を向いた人間のもののいいかたは、いつもこういうものではないでしょうか。私はもうそういう自分の性格に徹することになりました。とうとうと声を大にして叫ぶのではありません。聞いてほしいとせめて願うのは、ごく親しいものたち、わかりあえる仲間だけ。

ですからこの本は私の手紙です。親しいひとたちだけに読んでいただこうと思ひまして。そう考えますと、まだまだうちうちに語りたいことは山のようにあるのですけれど、きょうのところはひとまずこれまでといたしましょう。

あらあら かしこ とは手紙の終わりに女性がつかうあいさつのことばです。へあらあらへはへ粗々へという漢字をあて、意を尽くしておりますが恐縮でございますがの意味です。

それではみなさん

あらあら かしこ

木村 治美

目次
あらあら
かしこ

第Ⅰ章 同じ屋根の下で Ⅱ

日曜日 Ⅲ

ブランチ Ⅳ

寄りそう家族 Ⅴ

「助けて」と頼んでみたら？ Ⅵ

あの日、あの頃 Ⅶ

娘よ Ⅷ

自然のふところに抱かれて Ⅸ

山小屋にて Ⅹ

時はうつりて Ⅺ

思い出はたちがたく Ⅻ

ひきだしの底の二枚のカード Ⅼ

花を買い来て…… Ⅽ

見てはいけないもの Ⅾ

第Ⅱ章 エプロンしたまま 87

おふくろの味 89

割りきれない気持ち 96

ゆとり 98

乱れるところ 102

無駄のない人生なんて 105

給料とスニーカー 111

時は流れて 113

季節の匂い 116

ゆれるところ 124

秘密 127

死の影 131

「いい気なもんね」 138

たったひとりの味方 143

四面楚歌 145

子離れ 147

子育ての距離

149

流れるころ

151

第Ⅲ章 時と生をいつくしむ

159

運命のいたずら

161

時はすぎゆく

167

胸が痛む三枚のハガキ

171

アンの怒り

178

男ごころ

182

想いはとめどなく

185

シルバーエイジ

193

失う前に想像力を

198

日記帳

205

運と不運

206

以心伝心

213

追憶

216

思い出はつもる 218

第Ⅳ章 知的に生きる 221

ひとの目 223

自分の身は自分で守る 229

形のないもの 235

ロンドンの街にて 242

思いやり 249

カルチャー・ショック 254

身うち意識 257

集団を離れて 259

過ぎたるは…… 267

おせち料理 274

あとがき 281

あらあらかしこ

装幀／本くに子

第1章

同じ屋根の下で

